

## 鹿5 鹿皮のタツツケ = = = 猪・鹿・狸より

鹿の角がたちまち家々から消えてしまったのも、実は角買いが盛んに入り込んで、買って行ったのが、最も大きな原因だった。

ある家では、以前狩人だったにもよるが、主人が昔風を改め得ない性分も手伝って、もう何処の家にもなくなってから、軒や土間の隅に幾本も吊るしてあった。事実そうしてあれば、なにかにつけて、都合もよかったそうである。

それが近頃になって、角買いが目をつけ出した。売れ売れとしつこく責めるのに、つい断りきれなくなって、若主人が全部引き外して纏めて売ってしまった。家中を探し集めたら、十七、八本もあったそうである。その金で先祖代々の位牌をこしらえたと言うた。鹿の角がなくなっても、格別不自由はせなんだが、ただ蓑などの置場がなくなって、埒もなくそこいらへまるめたり載せておいたりして、始末が悪くなったそうである。



タツツケ姿

角とともに、鹿が村へ遣して行ったとも言えるものに、鹿の皮のタツツケがあった。秋から冬にかけて村々を歩けば、白い皮のタツツケを穿いた男を時折見た。麦畑に耕作していたり、山から薪を負って出て来たりした。多くはタツツケと同じような老人であった。畑などに穿いて出ると、たちまち皮の色が汚れてしまったが、一日山を歩いて来れば、木の枝や茨で洗濯されて、真っ白になったそうである。

家々を尋ねて廻ったら、どの家も同じように、以前はあったがもうないと言う。老人が死んでから、久しく物置に投げ込んでおくうち、いつか虫がついていたのに、慌てて谷へ捨てたのもあった。ぼろと一緒に、棒手振りなどに売ったのもあった。女たちが少しずつ切って、針止めや針山を作り作りするうち、紐ばかりになったのもあった。よくよく丹念な心掛けの善い家か、老人でもいる家のほかは、なくなっていたのである。律義者で通ったある老人は、親類への年始廻りに、かならず着けて来たと言う。

以前はタツツケ屋と言う専門の職人が、時折廻って来たそうであるが、多くは大鹿を獲ったたびに狩人自身がこしらえたものである。何でも以前のタツツケは、鹿が二頭なくては作れぬとも言うた。前に言うた、鳳来寺三禰宜の一人だった平沢某は、作るに妙を得ていて、方々から頼まれたものと言うた。そのタツツケを、まだ大切に蔵ってある家もあった。

いろいろの話を総合すると、鹿皮のタツツケを狩人が着けたのは、あまり古

くはなかった。以前は物持ちなどでない限り、めったに着けなんだ。狩人が、山で雨に遇った時など、慌てて脱いでまるめたと言うからは、よくよく大切な狩衣であったのである。



タツツケは、今では殆んど使われない言葉になってしまいました。ただし、歌舞伎では、大道具方の正式な着衣として、幕引きをする時、それ以外でも、芝居の途中で木戸を引き取ったり、ツケを打つとき、場面転換中に畳上敷を敷く時など、客から見えるときには必ずタツツケを着用する決りになっています。

(地芝居では、黒子が全部やりますが・・・。)

狩人の着たタツツケは、山を歩く時、ボロ(茨)から下半身を守るために、鹿皮で作ったタツツケ袴のことだと聞いています。